# 海外登山の記録

## カラコルム　ラトックⅠ峰（7145m）

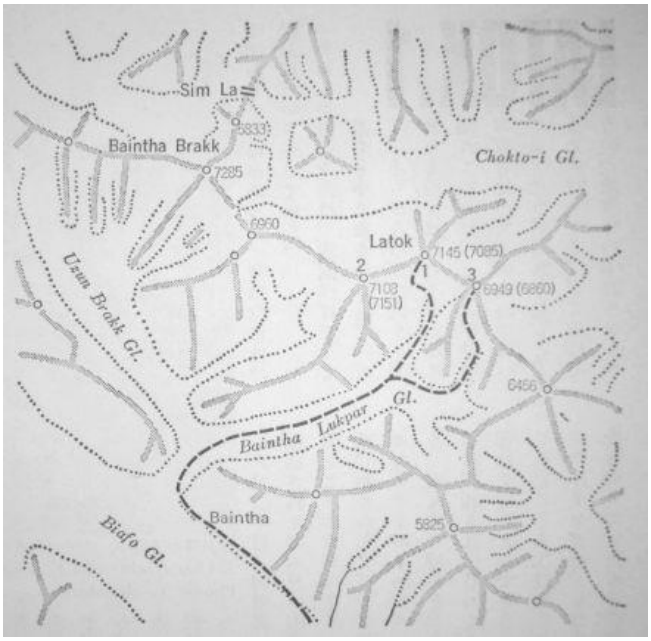
**日時**：1979 年6月～7月

**メンバー**：（隊長）高田直樹、他9名(ビアフォ・カラコルム登攀隊1979）

**概要**：1975年以来、ほぼ毎年の挑戦を退けてきたラトックⅠ峰を、高田直樹ら10名のパーティが初登頂した。

ラトックⅠ峰には過去4隊の挑戦があったが、そのうち頂上まで肉迫したのは、反対側のチョクトイ氷河から北稜を試みた 1978 年のアメリカ隊のみで、我々の目指す南面に関しては、1975年の日本山岳会東海支部隊のもたらした1・3 峰間クーロワールに関する情報と、1977年Ⅰ峰を断念してⅡ峰に登頂したイタリア・ボローニア隊によって作成された詳しい周辺地図があった。

写真で見るⅠ峰南面は、氷河から約 1000m が急峻な岩壁、6500mのアイス・キャップに達すれば、そこから頂上までは比較的簡単に行けそうだった。そこで登攀装備はこの 1000mに焦点をあわせて用意した。




（Latok Ⅰ周辺地図）

固定ロープはナイロン 9 ミリを 1000m、予備としてダンライン 8 ミリを 1000 m。べつに登攀用としてナイロン 9 ミリ 40m を 10 本。ナイロン 11 ミリ40m を 2 本用意した。通常ルート上に固定ロープをべた張りする場合、標高差の三倍が必要といわれているが、我々は重量を切り詰めるため、極力少なくすることにした。

**記録**

6 月 11 日、バインター・ルクパル氷河に BC（4600m）を設けた我々は、2 日間かけてルートを偵察した。南壁は上部にピナクルを持ち、その両側に、アイスキャップからせり出した懸垂氷河が我々を威圧してい

る。ルートは二つ考えられた。

一つは中央のオーバーハングした壁の右で、日本で想定していたラインである。もう一つは左手、Ⅱ峰寄りの岩壁部の一番短いところを突くものだが、上部懸垂氷河の崩落を考えれば、スピーディーな行動が要求され、高度順応の点で難があった。岩壁部の困難さや、取付部がクーロワール内になるという不安はあったが、もっとも危険の少ないルートということで、右ルートに決めた。

**第一期タクティックスの概要と実際**

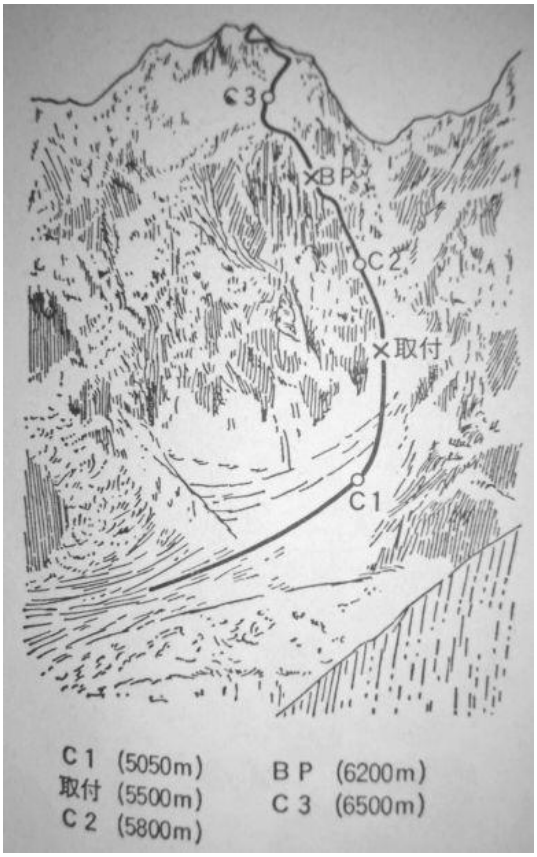
C2 までのルート開拓と荷上げを行う。

予定していた C1 がクーロワール内になるため、BC から 4900m、5050m の二箇所にデポをピストン輸送で荷上げ。第1隊は松見、奥、遠藤、第 2 隊は武藤、渡辺、城崎で、前者は第 2 デポ、後者は第 1 デポに入る。

第 1 隊は C1 建設と C2 までのルート開拓、第 2 隊は第 2 デポまでの荷上げを行い、完了後第 2 デポに移動する。高田、重廣はフリーとし、単独あるいは第 1 隊、2 隊と行動を共にする。中村は BC でハイポーター（2 名）による荷上げ管理。ハイポーターは、すでに第 1 デポに上がっている 300 キロ以外の物資（BC の 340 キロ）を第 2 デポに上げる。

6 月 18 日に配置についた第 1 隊、第 2 隊は 19 日から活動を開始。20 日第 1 隊 C1（5500m）建設、5600m まで開拓した。21 日降雪のためスノー・シャワー激しく登攀中止。雪崩の危険を感じた第 1 隊は第 2 デポまで降りた。30 分後（16 時）クーロワールの 5550mから雪崩発生。第 2 デポ近くまで押し寄せた。

この雪崩で C1 流失。23 日松見、奥は 5650m にビバークし、上部のルート開拓。C1 再建をあきらめ、第 2 デポを C1 として使う。24 日 C2 予定地（5800m）の雪稜に達する。25 日第 1、第 2 隊でビバーク地まで荷上げし、BC へ下る。




**第 2 期タクティックスの概要と実際**

C3 までのルート開拓と、C2 までの荷上げ。パーティーは、ルート開拓が武藤、渡辺、重廣、荷上げが松見、奥、遠藤、高田。

6 月 28 日 C1 に移動。29 日停滞。30 日第 1 隊 C2 入り、第 2 隊 C2 まで荷上げ。7 月 1 日武藤、渡辺はC2より上部のルート開拓。重廣はビバーク地まで逆ボッカ。第 2 隊 C2 へ荷上げ。2日渡辺、重廣がルート開拓。武藤逆ボッカ。3 日前日と同様。ルートは核心部に入り、登攀はあまりはかどらない。もろい壁を避け、垂壁にルートを取る。4 日渡辺、重廣はボルト 8 本を使って垂壁を突破。この 70m に 2 日を要した。

5 日第 1 隊は垂壁上部のクーロワールを抜け、さらに上部へ。高田は C1 より C2 に入る。第 2 隊は連日の荷上げ。6 日第 1 隊は C1 に下り、代わって第 2 隊が C2 入り。高田は BC に下る。

7 日第 2 隊がルート開拓、第 1 隊は荷上げ。8 日 C3 予定地（6300m）に到着。夜、全員 C1 に下り、

翌日 BC へ。

**第 3 期タクティックスの概要と実際**

C3 予定地はテントが張れないのでビバークをくり返すことにする。固定ロープの不足分は、取りつきから最初のビバーク地までに張ったロープを回収して補う。以後 C1 から C2 への補給はできなくなくなるが、上部のルート開拓に必要な装備・食料は C2 に荷上げ済み。第 1 隊松見、渡辺、重廣、第 2 隊武藤、奥、遠藤。他は BC で待機。

7 月 12 日第 1 隊 C2 入り、第 2 隊 C1～C2 の荷上げ。13 日第 1 隊 6200m に達し、ハンモック・ビバーク。第 2 隊 C2 入り。14 日第 1 隊 6400m に達する。第 2 隊はビバーク地までの荷上げ。15 日第 1 隊 6500m のアイス・キャップに達し、C3 を建設。第 2 隊ビバーク地までの荷上げ。16 日第 1 隊ビバーク地までの逆ボッカ。第 2 隊は前日と同様。

7 月 17 日第 1 隊は固定ロープを張りながら頂上へ向かうが、ロープの不足と天候悪化で C3 に引返す。第 2 隊は C2 に待機。18 日 C3、C2 とも悪天候のため停滞。19 日第 1 隊は再度アタック。新雪と頂上直下の岩場に時間を食い 19 時 45 分登頂。22 時 30 分 C3 帰着。第 2 隊は引き続き待機。20 日映画撮影のため重廣を残して第 1 隊 2 名 C2 に下る。代わって第 2 隊 C3 入り。21 日悪天候の停滞。22 日第 2 隊 3 名と重廣がアタック。天候は悪かったが固定ロープを利して 10 時 30 分、第 2 次登頂に成功した。

**（要約）**

6月10日、バインター・ルクパール氷河の4600m に B.C を建設。ルートは雪崩の危険が大きい3峰との間のクーロワールを避け、南壁右よりのピラー（標高差1000m）にとられたが、岩場に取り付くまでには危険なクーロワールの下部を横切らなければならなかった。4900m、5050mと2つの中間デポを設けて6月20日に C1（5500m）を建設。しかしその翌日の夕方、クーロワールの約50m上方から発生した雪崩が C1 を押し流し、以後はデポ地が事実上の C1 として使用された。

24日に5800mまでルートがのばされ、30日にC2（5800m）建設。ルート開拓と荷揚げは3人ずつの2チームによって交代で行われた。C2の上はルートの核心部となり、70m の垂壁をボルト8本を使い2日がかりで突破、その上の小クーロワールを抜けて7月8日、C3予定地（6300m）に達した。ここにはテントを張れないのでビバーク地とし、ルート開拓を続ける。15日、南壁上部のアイス・キャンプに達し、C3（6500m）が建設された。
この日キャンプに入った重廣・松見・渡辺の3隊員は、17日、固定ロープを張りながら頂上に向かうがロープの不足と天候悪化で C3に引き返した。
悪天候で1日休養したあとの19日、同じ3人が再度アタックし、新雪と頂上直下のスラブに苦労しながらも19時45分、初登頂に成功した。この間、武藤・遠藤・奥の3隊員は落石の集中する C2 での待機を余儀なくされ、20日にようやく C2に入った。第1次登頂隊の2人は入れ替わりに下降し、夕方の登頂で16㎜撮影ができなかった重廣隊員は C3に残って再度アタックした。21日は悪天候で停滞。翌日第2次隊の3人と重廣隊員は固定ロープの助けもあってスムーズに進行し、11時30分頂上に立った。

3000mの固定ロープ、約40日間を要した登攀はこうして終わりを告げたが、雪崩や落石の危険をかいくぐっての成功であった。

以上は主に『岩と雪』71 号のラトック 1 峰南壁・登攀の経緯（重廣恒夫）よりの抜粋引用である。ラトックⅠは、初登頂から 28 年たった今も第 2 登を許していない。他に『山岳第七十五年（1980 年）』（日本山岳会）に「ラトック遠征を終わって」（高田直樹）があり、実験登山隊としてのこの遠征隊のポリシーなどが記述されている。

（高田直樹記）